

カート・ヴォネガットにおける自殺と国家の論理

高 階 悟

I. 「死の本能」または「希死本能」 (Thanatos)

世界の自殺率順位リストによると、10万人当たりの自殺率 33.5% (2010年) の韓国が1位で、自殺率 31.5% (2009年) のリトアニアが2位である。日本の自殺率は、第二次世界大戦後に先進国の仲間入りをし、経済大国になった頃より上昇し、自殺率 23.8% (2011年) で5位に入っている。¹ 一方、秋田県の自殺率は、32.3% (2011年) で、1995年より17年連続して自殺率日本一の座を占め続けている。² 秋田県の自殺率を世界の中で見てみるとリトアニアを越して2位になる。人間は、一般には長く生き延びることを望むが、なぜ一部の人間は自らの生命を絶ち、死を選ぶのであろうか。自殺の記録は、古代エジプトの時代からあり、「自殺はほとんどの人間社会にみられる行為」³ と言われている。

すべての生き物には、等しくさまざまな形で機能が停止する「死」という「生」の断絶または終局がプログラムされている。但し、動物には、人間のような自己破壊行動的な自殺行為は見られない。動物は、個体の生存のための食欲、種の保存のための性欲、それに他の動物に食べられないように危険を回避する防衛本能があると言われている。動物は、3つの本能に従って生き延びており、人間のように悩んだり、絶望したりすることはない。動物は、人間のように「何のために生きるのか」と悩んだり、「生きるべきか死ぬべきか、それが問題だ」(To be, or not to be: that is the question.⁴) と不幸な運

命を嘆き悲しんだり、自分の行為に対して自己嫌悪や罪の意識を抱いたり、高齢化に伴う健康や老化現象などについて悲観したりはしない。

社会生活の中で生じるさまざまな不安、絶望などの感情から自らの死を選ぶ行為は、知能の発達した人間独自の行為である。ユダヤ人の心理学者フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) は、自殺の根本的な理由に「死の本能」または「希死本能」(Thanatos) を挙げている。⁵ フロイトは、生ある物はすべて無 (即ち死) に還元しようとする傾向、すなわち死の本能があると主張している。フロイトは、人間の「死の本能」と攻撃性 (aggression) から自殺と他殺の相関関係を指摘している。人間の持つ攻撃的傾向は、社会生活の中では内向させているが、極端に自己嫌悪のように内向すると自殺という形になり、極端に外向すると、他者への暴力や殺人という形になると指摘している。一般に自殺と他殺は表裏一体と言われている。時々マスコミ報道で耳にする犯罪者の言い訳「殺人を犯せば、死刑にされると思った」は、人間社会における人間の持つ攻撃性と「死の本能」を物語っている。罪の意識や嫌悪感を抱いて自殺する登場人物を多く描いているアメリカ作家カート・ヴォネガット (Kurt Vonnegut, 1922-2007) は、新興宗教を題材にした小説『猫のゆりかご』(Cat's Cradle, 1963) で「生きていることは副業で、死んでいることが本業である」⁶ と記述している。ヴォネガットの創作活動におけるテーマの一つは「死の本能」である。

フランスの社会学者デュルケーム (Emile Durkheim, 1858-1917) は、自殺を社会的な現

象と捉え、「自殺という行為は社会集団と個人の結合度と関係がある」⁷と指摘している。自殺の原因は、個人によって多様であるが、ヨーロッパ諸国の自殺統計から次のような傾向を明らかにしている。①自殺は女性より男性に多い、②自殺は既婚者より独身者や離婚者に多い、③自殺は民間人より軍人（特に下士官）に多い、④芸術家など教育程度の高い人々に自殺が多い、などを挙げている。このような傾向は、21世紀の今日にも当てはまる。⁸ デュルケームは、さらに「個人がどうであろうと、社会には人を自殺させようとする一定の傾向が現実存在している」⁹と述べている。デュルケーム理論のように社会的圧力や流行が個人を一定の方向へ導く力があるならば、世界の自殺率順リストは、それぞれの国家の社会状況を反映していることになる。社会・経済・政治状況の変動が自殺率の増減に大きく影響を与えられているとされており、自殺問題は、世界の国々や共同体が社会病理現象として取り組むべき課題の一つになってきている。年間の自殺者が3万人を超えた日本では、自殺対策基本法が2006年に施行された。

ここでは自殺を個人の任意の行為として片づけることなく、個人と社会集団の関係（結合度）から自殺を解明してゆく。自殺行為同様に、歴史上の殺人や大量虐殺も個人の行為というより社会集団（国家）が関係した一つの社会病理現象として記録されている。攻撃性が引き起こした社会病理現象と自殺の問題をドイツ系アメリカ作家カート・ヴォネガットの小説を通じて検証してみたい。ヴォネガットの作品を通じて人間が自殺に至る社会的なメカニズムと国家の論理を明らかにしたい。

II. ヴォネガットの『母なる夜』と戦争犯罪

カート・ヴォネガットの第3作目の小説『母なる夜』(Mother Night, 1961)は、第二次世界大戦を背景に時間と空間を超えた手法（メタフィクション）で書かれた虚実皮膜の戦争のドラマである。一般的に、戦争や革命などのような社会的危機の時期には自殺者が減少し、戦争が終わって平和になると自殺者が増加すると言われている。ヴォネガットは、第二次世界大戦

中の人種差別に基づいた未曾有のユダヤ人大量虐殺と戦後の自殺を扱っている。小説『母なる夜』の時代背景（事実）には、600万人のユダヤ人虐殺とアドルフ・ヒトラー総統（Adolf Hitler, 1889-1945.4.30）の自殺、アウシュヴィッツ強制収容所の所長ルドルフ・ヘス（Rudolf F. Hoess, 1900-1947.4.16）の絞首刑、ナチス親衛隊の将校アドルフ・アイヒマン（Adolf O. Eichmann, 1906-1962.6.1）の絞首刑がある。小説『母なる夜』の虚構は、1961年イスラエルの独房のアドルフ・アイヒマンに、“Do you feel that you're guilty of murdering six million Jews?”¹⁰と通りすがりに尋ねる戦争犯罪人ハワード・W・キャンベル（Howard W. Campbell, 1912-1962）の回想の部分である。この小説は、時間と空間が複雑に交差する45章から成り立っており、その各章の最初にはナチスの党章である「カギ十字」（swastika）が描かれている。「カギ十字」は、ユダヤ人の大量虐殺とヒトラー総統の自殺などの歴史上の事実の象徴であると共に、「カギ十字」に象徴されるネオ・ナチズムの社会集団が戦後のアメリカに出現した事実の表示であり、そして将来に再び全体主義的「カギ十字」集団が出現する可能性を暗示している。

カート・ヴォネガットは、第二次世界大戦にアメリカ兵として参戦し、ドイツで捕虜になり、連合軍のドレスデン（非武装都市）爆撃から生き残った。アメリカに帰還してから15年後、その不条理な戦争体験を基にナチス・ドイツの戦争犯罪人の告白形式の小説『母なる夜』を発表した。ヴォネガットのドイツでの戦争体験に基づいた小説は、第6作目の大傑作『スロウターハウス5』(Slaughterhouse-Five, 1969)で頂点に達する。『母なる夜』の主人公のハワード・キャンベルは、600万人のユダヤ人虐殺の共犯者としてイスラエルの監獄から自分の犯した罪について回想する。作者ヴォネガットがこの小説の最初に登場し、編者の注記でキャンベルの犯した罪について次のように述べている。

This book is rededicated to Howard W. Campbell, Jr., a man who served evil too openly and good too secretly, the crime of

his times.¹¹

キャンベルが犯した罪は、彼の時代が犯した犯罪と関連がある。彼の時代とは、第二次世界大戦に関わった国家（アメリカ、イギリス、ソ連、ナチス・ドイツ、日本など）を意味する。それぞれの国家は、国民を兵士として戦場へ送り込み、多くの死傷者を出しながら勝利を目指して戦争を続けた。戦後、戦勝国の兵士にとって敵国の戦死者は、統計上の数字になり、勇気と栄誉を讃える勲章の輝きとして記憶される。敗戦国の兵士にとって敵国の戦死者の数は、戦争犯罪人として裁かれる時の証拠になる。ヴォネガットは、戦争中に国家の論理に振り回され、戦争犯罪人として生き延び、最後に自殺に追い込まれた無力な人物の生涯を描いている。

『母なる夜』の主人公のキャンベルは、アメリカ人であるが、父親の勤務の関係でドイツに住み、ドイツの教育を受け、ドイツ語で書く劇作家として身をたて、ドイツ人の女優ヘルガ・ノト（Helga Noth）と結婚をした。アメリカが第二次世界大戦に参戦する3年前の1938年、キャンベルは、アメリカの諜報部員（FBI）として極秘に（secretly）スカウトされ、アメリカのスパイとしてナチス・ドイツの宣伝活動に公然と（openly）ラジオ放送のキャスターとして戦争に関わった。彼は、英語圏に向けてラジオでナチ宣伝の原稿を書き、その内容を放送した。キャンベルがスパイとして選ばれた理由は「彼が善を愛し、悪を憎んでいる」からであった。彼がスパイであることを知っていたのは、スカウトしたワータネン少佐（Major Wirtanen）、ドノヴァン将軍（General Donovan）とアメリカのルーズベルト（F. Roosevelt）第32代大統領だけであった。妻の女優ヘルガは、クリミア半島でのドイツ軍慰問中にソ連軍の攻撃を受け、行方不明になってしまった。キャンベルは、この世で最も大事な「無条件の愛」（uncritical love）を失ってしまった。戦後、キャンベルはドイツを逃れてニューヨークの屋根裏部屋に15年間密かに隠れ住んでいた。

ニューヨークの屋根裏部屋という煉獄（purgatory：天国に入る前に罪の浄化を受ける場）に住んでいる間に妻ヘルガと再会し、つかの間

の「無条件の愛」を体験する。が、2人の愛情が「魂の愛」（It's soul love.）¹²に達した時、再会した妻ヘルガは、実はヘルガの妹のレシであることが判明した。イスラエル政府の戦争犯罪人の追跡は、ついにキャンベルの隠れ家突き止め、キャンベルのメールボックスに「カギ十字」が書かれていた。追跡から逃れて、キャンベルはヘルガの妹レシと彼を支持するアメリカのネオ・ナチズムの社会集団と一緒にメキシコへ逃れようと地下室で待機する。そこへワータネン少佐が現れ、ヘルガの妹レシ（Resi）はソ連のスパイであることを告げる。その後、アメリカの連邦捜査員が地下室に突入してきた。ヘルガの妹レシは、キャンベルへの愛を告白して、青酸カリで自殺を図り、キャンベルの腕の中で亡くなった。キャンベルは、拘束されることなく約1時間後に釈放された。キャンベルは、自分の屋根裏部屋に戻り、その建物でただ一つ明かりがついていたアウシュヴィッツ強制収容所で少年時代を過ごしたユダヤ人のエプスタイン医師（Dr. Epstein）の部屋をノックした。エプスタイン医師に「私は、是非ともイスラエルに行って裁判を受けたい」と懇願した。¹³ キャンベルは、翌朝イスラエル政府関係者に捕らえられ、イスラエルで戦争犯罪人として裁判を待つ身になった。

イスラエルの監獄での回想がほぼ終わりに近づいた頃、キャンベルの無罪を証明することのできるアメリカのワータネン少佐からの手紙が届く。しかし、キャンベルは自由の身になることを拒否し、自分の犯した戦時中の罪の償いとして絞首刑を選択する。キャンベルの死は、国家が犯したユダヤ人の大量虐殺に対する罪悪感からの自殺でもある。キャンベル個人の罪は、アメリカのスパイとしてナチス・ドイツの宣伝活動に従事し、ヒトラー総統からの手紙を受け取り、アウシュヴィッツ強制収容所の所長ルドルフ・ヘスと一緒にパーティに参加し、アドルフ・アイヒマンと一緒に写真を撮ったことである。アウシュヴィッツ監獄を建設し、ユダヤ人虐殺を指揮したと言われているアドルフ・アイヒマンは、「600万人のユダヤ人の殺害に関して有罪だと思うか」という問いに対して「全くそうは思わない。世界中の兵士がそうであるよ

うに、私は上官からの命令に従っただけだ」¹⁴と弁解し、ほとんど罪の意識を表明していない。戦後、戦争中の兵士や民間人の行為を誰がどのように裁くか、どこまで裁くのかについての明快な境界線はない。ユダヤ人虐殺を指令した将校とその命令に従った兵士や時流に従った傍観者にも責任があるのか。戦争体験者の作者ヴォネガットは、「好奇心」から一方の国家権力に加担し、大量虐殺を傍観したキャンベルに厳しい裁きを下している。ヴォネガットは、戦時中に殺人や虐殺に直接手をくささなくとも、その事実を傍観していた者に絞首刑の裁きを下している。キャンベルは、兵士ではなく民間人としてナチス・ドイツの戦争に関わったのであるが、言い逃れをすることなく人類に対する犯罪の裁きを受けて、絞首刑となる。

キャンベルの死は、ユダヤ人に対する戦争犯罪、アメリカに対する国家反逆罪、ヘルガの妹レシの自殺に対する罪の意識に加えて不運な運命を嘆いての自殺ともとれる。キャンベルの運命は、アメリカのスパイになった時から、国家（アメリカ、ナチス・ドイツ、ソ連、イスラエル）の論理または国家の利益に振り回され続けた。国家の論理とは、国を愛し、国の利益のために行われた殺人または犯罪行為の罪を問わないという思想である。評論家トニー・ターナーは、キャンベルを「手先であり、犠牲者」となった人物であり、「混乱した不運なメッセンジャー」¹⁵と述べている。キャンベルは自分のメッセージを正確に伝達することができず、また相手のメッセージの真意も理解することもできなかった。ヘルガの妹レシが命をかけて愛の告白をした時、キャンベルは卑怯にも "I'm an old man." と嘘をついて逃れた。彼がラジオ放送で流したナチス・ドイツの宣伝と反ユダヤ主義のプロパガンダは英語圏の人々に大きな影響を与えた。彼の戯曲はソ連に持ち出され、ソ連の作家の作品として舞台上で上演され、一部はさし絵付きのポルノ作品として好評を得ていた。キャンベルは、他人に利用され続けている彼の人生や作品をシカゴの食肉加工場で処理される豚にたとえて次のように嘆いている。

"That's how I feel right now -" I said, "like a pig that's been taken apart, who's had experts find a use for every part. By God - I think they even found a use of my squeal! The part of me that wanted to tell the truth got turned into an expert liar! The lover in me got turned into a pornographer! The artist in me got turned into ugliness such as the world has rarely seen before."¹⁶

キャンベルは、自分がばらばらに切り裂かれ、彼の悲鳴 (squeal) までも国家に利用されている事実を認識する。ヘルガの妹レシは、「その男は骨の髄まで使い尽くされ、もう人を愛する気力さえない」と言って、キャンベルの腕の中で自殺する。キャンベルは「人からどこへ行けと言われなければ動けない」硬直状態 (a state of catalepsy)¹⁷ になってユダヤ人医師の玄関口に立ちすくむ。その後、イスラエル政府関係者によってニューヨークからイスラエルに送還された。キャンベルはイスラエルの独房の中で過去を振り返り、これ以上国家に振り回され、国家に切り裂かれないようにするために残された選択可能な道は、自らの命を絶つことだけであった。

Ⅲ. ヴォネガットの『母なる夜』とペルソナ (persona)

作者カート・ヴォネガットは、ベトナム戦争 (Viet Nam War, 1965-73) の最中1966年に『母なる夜』が再版される際に新たな序文を追加している。その序文では、この小説に含まれている教訓を紹介している。

I don't think it's a marvelous moral; I simply happen to know what it is: We are what we pretend to be, so we must be careful about what we pretend to be.¹⁸

「われわれがなにかを装うこと」は、社会生活の中で、男性らしくまたは女性らしく振る舞うことであり、職業人がそれぞれの仕事の役割

を演じることであり、時代を生き残るために引き受ける生き方でもある。問題は、各個人がその役割を自律的に選んだものなのか、社会集団（国家）や他人にコントロールされた行為と役割なのかということである。『母なる夜』の主要な登場人物は、戦時中にそれぞれの国家のコントロールのもとにさまざまな役割を演じ、多様な仮面（ペルソナ）をかぶり、時流に適應した仮面と自我の板挟みになって悩み、不運な運命に絶望する。仮面（ペルソナ）という言葉は、役者が舞台の上で被る仮面のことであるが、心理学者 C. G. ユング（Carl Gustav Jung, 1875-1961）は、人間の社会における役割をペルソナと呼んで、次のように述べている。

根本的には、ペルソナは何ら「実在のもの」ではない。ペルソナとは、「ひとりのひとが、何ものとして現れるか」ということに関して、個人と社会との間に結ばれた一種の妥協である。そのひとは名前を得、肩書を手に入れる、職務を演じ、これこれの人物となる。これは、いかにもある意味では現実だが、当人の個性ということからいえば二次的な現実、単なる妥協の産物にすぎず、その形成にはしばしば、本人よりもむしろ他人の人々が多く関与している。¹⁹

ペルソナという用語は、個人と社会集団または他人との微妙な関係を言い当てている。『母なる夜』の主人公のキャンベルは、科学者の一人息子であり、ドイツ人の女優ヘルガの夫であり、アメリカ人であり、劇作家であり、アメリカの諜報部員であり、ナチス・ドイツの宣伝要員でもあり、さまざまな役割を演じている。スパイという古代から行われてきた職務は、ひそかに敵国側の情勢を探って味方に通報するという2役以上の役割を演じる危険を伴う任務である。戯曲家のキャンベルは、アメリカのワータネン少佐に派手に大芝居を打って人をだますことができる彼の「大根役者」(ham)としての才能を買われてアメリカの諜報部員に極秘にスカウトされた。キャンベルは、スパイとしての役割を演じた時から2つの国家の論理に利用され、2重・3重の生活が始まったのである。戦争が長期化するにつれ、2つの国家の利益、社

会と個人の利益、モラルのギャップが次第にスパイの人格を蝕み、分裂・崩壊の危機に向かってゆく。社会集団と個人の価値観のバランスは崩れやすい、何故なら両者の力関係やパワー（影響力）は平等ではなく、個人の集合体である国家や社会の倫理が個人を凌駕し、国家が個人の人格や良心をコントロールし、押しつぶすことがあるからである。心理学者 C. G. ユングは、『自我と無意識』で「巨大な社会」のパワーについて次のように述べている。

巨大な社会は、たとえ、卓越した人間ばかりで構成されているとしても、道徳性と知性においては、愚鈍で乱暴な一頭の巨獣に等しい。組織が大きければ大きいほど、その道徳性と盲目的な愚かさも、それだけ避けられなくなる。²⁰

社会集団（国家、人種・民族、会社、宗教集団等の組織）は、時には先進国であれ発展途上国であれ「一頭の巨獣」となって凶悪かつ卑劣な行為を行うことがある。モンスター化したナチス・ドイツの社会では、次第に個人の自由が奪われ、個人の自律的な行動ができなくなり、良識ある人々は社会的・精神的に窮地に追い込まれてゆく。キャンベルは、ニューヨークの屋根裏部屋に隠れ住んでいた時、ナチス・ドイツのようなネオ・ナチズムの集団に出会った時、「精神分裂病」(schizophrenia)の発作に襲われた。²¹ 戦後、ヒトラー総統は、硬い仮面を被ったまま自殺をし、ユダヤ人虐殺を指揮したアドルフ・アイヒマンは、その仮面を捨てて国外に逃げた。キャンベルは、アメリカに逃れたが、仮面を被ったことへの贖罪として自殺した。

『母なる夜』にはキャンベルのように国家のために活動し、不幸な運命に出会うスパイが多く登場する。レシ・ノト (Resi Noth) は、キャンベルの妻ヘルガの妹であり、キャンベルの前にヘルガとして現れたソ連のスパイでもあった。キャンベルの屋根裏部屋の隣人ジョージ・クラフト (George Kraft) は、老画家であり、キャンベルと一緒にチェスを楽しむ親しい友人であり、アメリカのアルコール中毒者更生会 (Alcoholics Anonymous) の会員であり、1935年よりアメリカで活動していたソ連のスパイ

イでもあった。クラフトは、戦争犯罪人キャンベルの情報をリークした張本人であるが、最終的にはキャンベルを第三国に逃がそうとしていた。が、クラフトは、アメリカ捜査機関に逮捕され、ソ連に強制送還されることなく、連邦刑務所に収容され、画業を継続する。ロバート・ウィルソン (Robert S. Wilson) は、アメリカのネオ・ナチズムの総裁のおかかえ運転手であり、かつての「ハーレムの総督」であり、日本のスパイであった。ハインツ・シルトクネヒト (Heinz Schildknecht) は、キャンベルがナチス・ドイツの宣伝要員の時、机を並べて働いた親しい友人であり、ユダヤ人の反ナチズム地下運動員でもあった。ハインツは、戦争犯罪の裁判の証人としてキャンベルのドイツでの任務を憎悪を持って証言した。

スパイとしての任務とキャンベルへの愛の板挟みになって自殺したレシ・ノトの生涯を見たい。レシは、ベルリンの警視総監の娘であり、キャンベルの妻ヘルガの妹であり、愛犬を愛する少女であり、ソ連のスパイとしてキャンベルの前に現れた。レシがなぜソ連のスパイになったかは記述されていない。しかし、レシとキャンベルとの関係が大きな要因になっている。少女時代から「希死本能」が強いレシが10歳の時にキャンベルに会って、恋に陥った。キャンベルは、戦時中に郊外へ疎開する寸前のレシの家を訪問し、レシが可愛がっている犬の射殺を依頼された。虚無主義の少女レシは、激しくなる戦争と愛犬の死を前にして「わたしも死んだほうがましだわ」²² と言った。キャンベルは「わたしはそうは思わない」と元気づける。レシはキャンベルを愛し始め、「無条件な愛」に生きるという人生の目的を自覚する。レシがソ連のスパイになったのは、アメリカ在住の戦争犯罪人を見つけようとするソ連の政治的戦略とレシのキャンベル探索活動が一致したためである。レシは、ヘルガという仮面を被ってキャンベルの前に現れ、妹のレシであることを告白した後、「いつかわたしのために芝居を書いてください」²³ と劇作家キャンベルに新しい役割を求める。ソ連のスパイである素性が知られた後、レシは罪の意識を感じながらもキャンベルへの愛の告白をし、キャンベルに生きるための目的を尋ね、

救いを求める。

"Then, tell me what to live for - anything at all."²⁴ レシの問い掛けに、キャンベルは応えることができない。"I am sorry I have nothing to live for."²⁵ と言って、レシはキャンベルの目の前で自殺する。

ヴォネガットは、人生における永遠の課題を "Tell me what to live for." または "What is the purpose of life?"²⁶ として繰り返し小説の中で扱っている。ヴォネガットの第10作目の国家によって放射能に汚染された廃墟の町を描いた小説『デッドアイ・ディック』 (*Deadeye Dick*, 1982) にも類似した場面がある。登場人物の女性が愛を告白し、新たな社会的役割 (ペルソナ) を求め、精神分裂的な依存症の兆候と破滅を現す状況である。薬局で働く劇作家のルディ・ウォールツ (Rudy Waltz) の店に自動車販売業者の妻シリア・フーヴァー (Celia Hoover) が精神錯乱状態で訪問し、ルディに愛を告白し、"I came here to ask you write another play."²⁷ と言って「新しい役割」を求める。薬剤師のルディは、芝居ではなく、薬が必要だと言って、警察に連絡する。シリアは、ルディの対応に怒り、店内の物を破壊して逃げ去る。その後、シリアは、洗剤のドレイノを飲んで自殺をする。

「人生の目的とはなにか」、これは人類が生存し始めた時から今日までの永遠の文学的、哲学的、宗教的な難問である。ヴォネガットは、この課題について人間の「不条理な運命」と「自由意志」 (free will) という角度からさまざま物語を展開している。ヴォネガットの初期のSF小説『タイタンの妖女』 (*The Sirens of Titan*, 1959)、戦争体験に基づいた傑作『スローターハウス5』 (1969)、『チャンピオンたちの朝食』 (*Breakfast of Champions*, 1973)、『タイムクエイク』 (*Timequake*, 1997) では、不自由な社会の中での個人の自由意志の問題が大きなテーマになっている。ヒューマニストのヴォネガットの自由意志とは、個人の自律的な意志決定によって思い通りにならない人生を生き延びることであり、自己嫌悪や絶望による自殺は、

個人の自由意志によるものではなく、社会集団や他人の関与によって引き起こされた結末である。ヴォネガットの大傑作『スローターハウス5』の主人公ビリー・ピルグリム (Billy Pilgrim) の事務所に、「不条理な運命」に立ち向かって生き延びるためのメッセージが掲げられていた。

GOD GRANT ME THE SERENITY TO
ACCEPT THE THINGS I CANNOT
CHANGE, COURAGE TO CHANGE THE
THINGS I CAN, AND WISDOM
ALWAYS TO TELL THE DIFFERENCE.²⁸

「神よ願わくばわたしに変えることのできない物事を受け入れる落ち着きと、変えることのできる物事を変える勇気と、その違いを常に見分ける智慧をさずけたまえ」

IV. 自殺パーラーとサバイバーズ・ギルト (survivor's guilt)

ヴォネガットの小説には、デュルケームの言葉「個人がどうであろうと、社会には人を自殺させようとする一定の傾向が現実存在している」を裏付けている短編小説がある。未来社会を描いたSF短編小説「ようこそモンキーハウスへ」("Welcome to the Monkey House,"^{トウ・ビー・オー・ノット・トウ・ビー} 1968)と「2BR02B」("2BR02B," 1975)である。この短編小説の世界は、人口過剰のため自殺パーラーでの自殺が制度化され、国家が自殺を推奨している未来社会である。ヴォネガットのSF小説は、イギリスのオルダス・ハックスリー (Aldous L. Huxley, 1894-1963) の『すばらしき新世界』(*Brave New World*, 1932)やジョージ・オーウェル (George Orwell, 1903-1950) の『1984』(*Nineteen Eighty-Four*, 1949)、アメリカのレイ・ブラッドベリ (Ray Bradbury, 1920-2012) の『華氏451度』(*Fahrenheit 451*, 1953)などの反ユートピア小説の伝統を引き継いでいる。ジョージ・オーウェルのSF小説『1984』では、国家のスローガンは「自由とは服従である。無知は力である」(Freedom is slavery. Ignorance is strength.)²⁹であり、日常生活において個人の

自由はほとんどなく、国家権力による国民への管理・監視体制が徹底した秩序ある全体主義的な社会と反逆する公務員ウィンストン (Winston Smith) が描かれている。

ヴォネガットの「ようこそモンキーハウスへ」(1968)の世界は、地球の人口が170億に達し、国家が自殺奨励策として自殺パーラー (the Federal Ethical Suicide Parlor) を街角に設置し、そこでは自殺ホステスに頼みさえすれば、ゴンドラ式の寝椅子に横になっている間に、痛みもなく殺してもらえる社会である。さらに一般市民 (nothingheads) は、下半身を麻痺させるピルを1日に3回服用することを義務づけられていた。この社会の男性や女性のはほとんどは、猫にくわえられた生き物のような状態であった。セックス禁止の社会では、一般市民が性的な素晴らしい体験ができるのは、死への案内人の自殺ホステスとのパーラーでの語らいの時間だけであった。"Sex is death."³⁰の社会であった。反逆者の主人公の詩人ビリー (Billy the Poet) は、性の解放を目指して自殺ホステスのナンシー (Nancy) を誘拐し、63歳の処女ナンシーに生きる喜びの快楽を体験させる。しかし、最終的に自由な社会で人間性を回復させるか、日常生活から性生活までを管理・監視された「檻の中の猿」のように生きるかは、ナンシーの自律的な選択に委ねられてこの短編は終わる。

ヴォネガットの短編「ようこそモンキーハウスへ」の世界は、自殺パーラーを設置して一般市民を管理する国家とその社会制度へ反逆する若者のドラマである。一般市民は、「猫にくわえられた生き物」のように無力で従順であり、国家と一般市民の力関係は、捕捉する猫と餌食になるネズミのような力関係で描かれている。

ヴォネガットの短編「^{トウ・ビー・オー・ノット・トウ・ビー}2BR02B」(1975)の世界は、人口過剰と高齢化社会の22世紀の未来社会である。アメリカの人口は4千万人に固定されており、市町村には連邦終止局 (the Federal Bureau of Termination) が設置した自殺用のガス室があり、人間の平均寿命は129歳の時代である。シカゴの産科院でエドワード (Edward) は、不安を抱きながら、妻の出産を待ちわびていた。主人公の老人画家は、産科

病院の改装に伴って、治療室の新しい壁画「生命の幸せの園」(The Happy Garden of Life)の製作に取り組んでいた。そこへ壁画のモデルに選ばれた連邦終止局の「ガス室」ホステスのレオーラ (Leona) が派手な格好をして入ってきた。産科院長ヒッツ (Dr. Hitz) が来て、父親のエドワードに「3つ子が産まれた」と知らせる、父親は「万歳」と元気なく反応する。人口制御が徹底しているこの社会では、ひとりの新生児の生存には、それに代わって死を志願する人間が必要であり、法律で両親が志願者を見つけない限り子供の生存は許可されない制度になっていた。父親エドワードは、3つ子を生かすために240歳の産科院長ヒッツを射殺し、次に2人目としてガス室ホステスのレオーラを射殺し、3人目としてエドワードは56歳の自分を撃った。200歳の老人画家は、その有様を目撃し、壁画「生命の幸せの園」を描く気持ちを失い、絵筆を足下に置いた。その画家は、"Easy Go," (ぼっくり) "Good-bye, Mother," (お母さんさよなら) "Weep No More," (もう泣かない) "Why Worry?" (なんで悩むの) と呼ばれているガス室の電話番号「2BR02B」をまわし、自殺の予約を入れる。連邦終止局の自殺ホステスは、「将来の世代は、あなたのことを心から感謝するだろう」³¹ と礼を言った。老人画家は、芸術家であるが、抵抗する想像力も乏しく、悲惨な現実と直面した時、国家が奨励し、賛美する「自殺」以外に選択することができなかった。ヴォネガット51歳の時に書かれたSF短編「2BR02B」^{トウ・ビー・オー・ノット・トウ・ビー}には、国家の法律・権力に反抗する人物が描かれていない。ヴォネガットが描いた22世紀のアメリカは、戦争も貧困もなく、病気も老化の問題も克服されたが、人口制御のために自殺を援助する施設が身近にあり、産科医院での赤ん坊の誕生と同じように「ガス室」での大人の自殺が日常化した社会であった。

ヴォネガットのSF短編小説「ようこそモンキーハウスへ」と「2BR02B」^{トウ・ビー・オー・ノット・トウ・ビー}は、国家が政策として実施している「自殺パーラー」を題材にしている。「自殺パーラー」は、国家の論理が国民の寿命をコントロールし、自殺を奨励する公共施設である。「死刑制度」は、法律に

基づいて国家が犯罪者の生命を奪う殺人行為であり、「自殺パーラー」は、人口制御という目的のために国家が国民に自殺を教唆する殺人施設である。時々国家の論理は、敵国との戦いを「聖戦」と名付けて国民を戦場に送り出し、若者を特攻隊員として敵の艦隊への体当たり攻撃を教唆し、差別と偏見に基づいてある人種・民族をガス室で大量虐殺し、戦陣訓の「生きて虜囚の恥ずかしめを受けず」に基づいて国民に自殺を強要することもある。戦争体験者ヴォネガットは創作活動を通じて、人間の生命をもてあそぶ社会集団や戦争・紛争、ユダヤ人虐殺、ドレスデン無差別爆撃、広島・長崎への原爆投下、アルメニア人虐殺などの大量殺戮を小説の題材に扱っている。ヴォネガットは、1984年5月の「核状況下における文学—なぜわれわれは書くのか」をメインテーマにした国際ペン東京大会に特別ゲストとして初めて来日した。滞在中は大江健三郎や井上ひさしなどと対談をし、「優しさ」(decency)に基づいた戦争のない社会への希望を述べている。³² ヴォネガットは、ベトナム戦争やイラク戦争などあらゆる戦争に反対し、武器のない平和な社会を信じて創作活動や社会活動を続けたが、晩年には人類の未来に関して悲観的な見解が小説やエッセイ集に見られる。晩年の小説『ホーカス・ポークス』(Hocus Pocus, 1990)には、アメリカのグラント・キャニオンの断崖に刻まれた地球の墓碑銘：「われわれはこの惑星を救う気があれば救えたのに、しかし、われわれはいまほいほど俗悪であった」がある。

作家ヴォネガットにおける自殺のもう一つの鍵は、サバイバーズ・ギルト (survivor's guilt) である。サバイバーズ・ギルトは心理学用語で、戦争や不幸な事故や自然災害などの体験から生き残った人間が、亡くなった人々に対して感じる罪悪感である。この用語は、もともとナチスによるホロコースト (ユダヤ人大量虐殺) を生き延びた人々が「生き残って申し訳ない」と強く訴えて知られるようになった。³³ 現在では、2011年3月11日東北地方を襲った東日本大震災 (死者15,878名、行方不明者2,713名：警察庁2012,12.12.) の後、身近な家族や知人などを亡くした「対象喪失」を体験し

た人々の慢性的な「震災トラウマ」の原因の一つにサバイバーズ・ギルトが論じられている。³⁴

サバイバーズとは、生存者であり、生き残っている者であり、不幸な戦争や事故や自然災害の遺族でもある。62歳のヴォネガットは、日本初来日の3ヶ月前、1984年2月13日（ドレスデン空爆の記念日）に自宅で睡眠薬と酒による自殺を図った。ヴォネガットのサバイバーズ・ギルトは、1944年ヴォネガットが休暇で家に帰っている時に母親イーディス56歳が睡眠薬自殺をしたことであり、1945年の連合軍のドレスデン無差別爆撃（死者約25,000名）から生き残り、焼けこげた多くの死体を火葬場まで運んだことであり、1958年義兄が列車事故で亡くなり、翌日姉アリスが4人の子供たちを残して41歳で乳ガンで死亡したことであり、1971年ヴォネガットの長男マークが精神病に苦しみ入院したことなどをあげることができる。これらの悲惨な戦争体験や不運な出来事は、心優しいヴォネガットの心的外傷（*truma*）や心的外傷後ストレス障害（*Post Traumatic Stress Disorder*）になり、創作活動に慢性的に影響を与えたと思われる。身近な家族等に自殺者がでると、生存者はその死の呪縛を背負い続け、時には不幸な出来事や孤独感や絶望感が引き金になって自責の念に駆られて自殺者の跡を追うこともある。ヴォネガットは、両親の自殺を体験した人間について「自殺者の息子たちは一日の終わり、血糖が低下する時刻になると、しばしば自殺を考える」³⁵と『ローズウォーターさん、あなたに神のお恵みを』（*God Bless You, Mr. Rosewater*, 1965）で述べている。ヴォネガットは1961年に猟銃で自殺をしたアメリカ作家ヘミングウェイ（*Ernest M. Hemingway*, 1899-1961.7.2）に関して「彼もわたしも中西部に生まれ、新聞記者を志し、どちらの父親もガン・マニアで、どちらもマーク・トウェインに多くのものを負っており、自殺者の息子である」³⁶と語っている。

アーネスト・ヘミングウェイは、1954年にノーベル文学賞の受賞発表後、飛行機事故に遭い、ノーベル文学賞の授賞式には出席できず、事故の後遺症（鬱病）に悩まされて自殺した。ヘミングウェイ家には自殺者が多く、不幸な出来事が続いたことも事実である。ヘミングウェイの

父親クラレンスは、活動的な医師であったが、1928年に猟銃で自殺した。1961年のヘミングウェイの猟銃での自殺後、1966年に妹のアーシュラが睡眠薬で自殺し、1982年に作家の弟レスターがピストルで自殺した。ヘミングウェイの長男グレゴリー・ヘミングウェイ（*Gregory Hemingway*, 1931-2001）は、アルコール依存症に苦しみ、性転換をし、マイアミ拘置所で病死した。文豪ヘミングウェイの孫娘マーゴ・ヘミングウェイ（*Margaux L. Hemingway*, 1954-1996.7.2）は、モデル・女優としての人気を得たが、アルコール依存症に苦しみ、祖父ヘミングウェイが亡くなった7月2日に睡眠薬を多量に飲み自殺した。自殺の原因は、さまざまな事情があり一つに特定はできないが、マーゴ・ヘミングウェイの自殺の原因の一つは、ヘミングウェイ家の不幸な出来事や事故の轍わだちに陥ったことである。マーゴ・ヘミングウェイは、女優として成功したが、原因不明の慢性的なストレス障害に悩んだ。それはヘミングウェイ一族の不幸な出来事に対して、生き残っている遺族が感じるサバイバーズ・ギルトといえるかもしれない。

ヘビースモーカーで有名なカート・ヴォネガットは、「希死本能」と自殺を乗り越えて天命をまっとうした。アメリカの作家マーク・トウェイン（*Mark Twain*, 1835-1910）から名前をとった長男マーク・ヴォネガット（*Mark Vonnegut*, 1946-）は、精神分裂病から立ち直り小児科医として活躍している。ヴォネガットは、84歳の時にマンハッタンの自宅の階段から転倒して頭を打って意識不明になり、本人の意志に従って医師の息子マークの手によって生命維持装置が外された。³⁷ ヴォネガットは、波乱万丈に満ちた人生を送ったが、メッセンジャーとしての作家活動を通じてわれわれ生存者へ次のような言葉（墓碑銘）を残した。

すべてが美しく、つらいことはなにもなかった。（*Everything Was Beautiful, and Nothing Hurt.*）³⁸

註

- ¹ 国の自殺率順リスト Wikipedia, 2012, 9.16.
- ² 秋田魁新報 2012, 6.6.
- ³ 布施豊正 『自殺と文化』 新潮選書, 1985, p.15
- ⁴ William Shakespeare, *Hamlet* Act III, Scene I -56
- ⁵ 大原健太郎編 『自殺学：自殺の精神病理』 至文舎, 1974, p.155
- ⁶ Kurt Vonnegut, *Cat's Cradle*, Delta Pub., 1963, p.115
- ⁷ 布施豊正 『自殺と文化』 新潮選書, 1985, p.160
- ⁸ Ch・ボードロ, R・エスタブレ 山下雅之・都村聞人・石井素子訳 『豊かさのなかの自殺』 藤原書店, 2012。『豊かさのなかの自殺』では、自殺と社会現象について19世紀の傾向と経済成長を遂げた20世紀の傾向を分析・検証している。
- ⁹ 大原健太郎編 『自殺学：自殺の精神病理』 至文舎, 1974, p.214
- ¹⁰ Kurt Vonnegut, *Mother Night*, Dell Pub., 1966, p.125, 飛田茂雄・訳『母なる夜』早川書房, 2008. 参照
- ¹¹ Ibid., p. xii
- ¹² Ibid., p.101
- ¹³ Ibid., p.192
- ¹⁴ Ibid., p.125
- ¹⁵ Tony Tanner, *City of Words*, Jonathan Cape, 1971, p.185
- ¹⁶ Kurt Vonnegut, *Mother Night*, Dell Pub., 1966, pp. 155-156
- ¹⁷ Ibid., 1966, p.193
- ¹⁸ Ibid., 1966, p.v
- ¹⁹ C.G.ユング 松代洋一・渡辺学訳 『自我と無意識』 第三文明社, 2006, p.67
- ²⁰ C.G.ユング 松代洋一・渡辺学訳 『自我と無意識』 第三文明社, 2006, p.60
- ²¹ Kurt Vonnegut, *Mother Night*, Dell Pub., 1966, p.71
- ²² Ibid., p.79
- ²³ Ibid., p.105
- ²⁴ Ibid., p.166
- ²⁵ Ibid., p.173
- ²⁶ Kurt Vonnegut, *Breakfast of Champions*, Dell Pub., 1973, p.67
- ²⁷ Kurt Vonnegut, *Deadeye Dick*, Delacorte Press, 1982, p.183
- ²⁸ Kurt Vonnegut, *Slaughterhouse-Five*, Panther, 1979, p.46, 伊藤典夫・訳『スローターハウス5』早川書房, 1978. 参照
- ²⁹ George Orwell, *Nineteen Eighty-Four*, Penguin Book, 1962, p.7
- ³⁰ Kurt Vonnegut, *Welcome to the Monkey House*, Dell Pub., 1968, p.46
- ³¹ Kurt Vonnegut, *Bagombo Snuff Box*, Berkley Book, 1999, p.322
- ³² 高階悟 「カート・ヴォネガットと戦争体験」『秋田県立大学総合科学研究彙報』第9号, 2008, p.44
- ³³ 香山リカ 『悲しむのは、悪いことじゃない』 筑摩書房, 2012, p.9
- ³⁴ 和田秀樹 『震災トラウマ』 ベスト新書, 2011, p.108
- ³⁵ Kurt Vonnegut, *God Bless You, Mr. Rosewater*, G.P. Putnam's Sons, 1991, p.138
- ³⁶ Kurt Vonnegut, *Fates Worse Than Death*, G.P. Putnam's Sons, 1991, p.61
- ³⁷ 巽孝之監修 『カート・ヴォネガット』 彩流社, 2012, p.198
- ³⁸ Kurt Vonnegut, *God Bless You, Dr. Kevorkian*, Washington Square Press, 1999, p.11, Kurt Vonnegut, *Slaughterhouse-Five*, Panther, 1979, p.84